

楽曲紹介

解説=野本由紀夫

9/15

9/16

9/19

今月の定期について

今月の指揮者アンドレア・バッティストーニは、初物尽くしである。マーラーの交響曲第5番を東京フィルで指揮するのは、今回が初めてである。

それと同じぐらい期待されるのが、バッティストーニの編曲の世界初演である。ピアノの巨匠フランツ・リストのヴィルトゥオーゾ作品(超絶技巧曲)を、オーケストラ編曲した本人が指揮をする。これまでも何度か彼の管弦楽作品は東京フィルで取り上げられてきたが、とりわけ昨年(2021)11月の定期でフルート協奏曲『快樂の園〜ボスの絵画作品によせて』を自作自演したことは記憶に新しい。今回も、彼がオーケストレーションに通じていることを、改めて見せつけるに違いない。

バッティストーニによれば、今回の選曲には「隠しテーマ」があるという。それは、「暗闇・絶望」から「光・希望・新たな生命」に至るまさに「再生」だという。この困難な時代にこそ、期待の定期演奏会である。

リスト=バッティストーニ編

『巡礼の年』第2年「イタリア」より「ダンテを読んで」

ごく一般的なイメージからすると、フランツ・リスト(1811-1886)はショパン(1810-1849)とも大親友だった「ピアノの魔術師」「史上最高のピアニスト」という認識かもしれない。しかしリストは、「標題音楽(Programmusik)」という概念を1855年に打ち立て、19世紀に唯一新しく生まれた形式である「交響詩」の創始者として、諸民族の独立運動に「音楽的手段」を与えて、世界史に大きな影響を残した大人物だった。

ピアノ独奏曲集『巡礼の年』は4集からなり、それぞれ「第1年：スイス」「第2年：イタリア」「第2年補遺：ヴェネツィアとナポリ」「第3年」である。しかし、最晩年に作曲された「第3年」を除くと、最初の3集はリストがヴィルトゥオーゾ(超絶技巧の)ピアニストだった20代後半に書き始められ、ピアニストを引退して作曲・指揮に専念した1850年代に根本的に書きなおされた。原曲の「ダンテを読んで」

「ソナタ風幻想曲」は、ピアノ業界では「ダンテ・ソナタ」と通称され、演奏会やコンクール映えする作品として、取り上げられる機会もずば抜けて多い。バッティストーニがオーケストラ用に編曲したことにより、一種の交響詩として聴くことも可能だろう。

リストは1830年代、愛人となったマリー・ダグー伯爵夫人(1805-1876)といっしょにダンテ・アリギエーリ(1265-1321)の『神曲』(Divina comedia)を何度も読み返している。後にリストは、合唱・独唱付きの「ダンテ交響曲」も書くぐらいだから(1855-56)、『神曲』には相当大きな感銘を受けたようだ。その第1部「地獄篇」(1304-08頃成立)に書かれた恐ろしい情景、淫乱、憎悪、苦痛の状態から受けた強烈な印象を、いわば**音楽による読書感想文**として作曲したのが「ダンテ・ソナタ」である。「ダンテを読んで」というタイトルは、ヴィクトル・ユゴー(1802-1885)の詩集『内なる声』(Les voix intérieures)の第27番の詩のタイトルから取られた。したがって、音楽は筋書きを追っていない。

以下バッティストーニ編に基づいて解説する。序奏主題は、金管楽器群の「タター」という前打音リズムが特徴的で、「**地獄門の動機**」とも呼ばれる。響きは、中世以来「**悪魔の音程**」と呼ばれる三全音音程(ピアノの鍵盤で数えると、黒鍵を入れて7つ分の音程)であり、まさに「**地獄篇の始まり**」だとわかる。

ほどなく、弦楽器主体の主要主題が静かに始まる。盛り上がりを見せると、ハーブのグリッサンドも交えた推移部となり、管楽器群が**ff**で吹奏する嬰へ長調の「**救済の動機**」(副主題)になる。弦楽器群は、3連符で滝のように下る音型で伴奏している。ちなみに、嬰へ長調は伝統的に、天国や昇天を表すときに使われてきた調である。

それがいったん静まると、ハーブ伴奏に乗って、ヴァイオリン独奏で愛に満ちた音楽が奏でられる。ここはダンテの『神曲：地獄篇』に登場する「**フランチェスカ・ダ・リミニの愛の悲劇の情景**」ではないか、ともいわれてきた。バッティストーニも、次ページ特別寄稿にあるように、この中間部のカンタービレに「不幸な恋人たち、パオロとフランチェスカの物語」を見いだしている。

徐々に音楽の音量と勢いが増していくと、展開部となる。今までに出てきたモチーフ(リズムや主題)すべてが断片的に組み合わせられていく。再び「地獄門」のモチーフが鐘(チューブラーベル)で登場すると、再現部である。ハーブとヴァイオリン群の静かなトレモロで「救済の動機」が現われると、終結部となる。

9/15

9/16

9/19

最後は全楽器による勇壮な響きとなって、曲は閉じられる。

【作曲年代】第1稿1837年ごろ／改訂稿1849年 【編曲年代】2021年 【原曲初演】1839年、ウィーンにて、作曲者本人のピアノ独奏による 【編曲初演】2022年9月15日、東京にて、編曲者本人の指揮、東京フィルハーモニー交響楽団の演奏による
【編曲楽器編成】フルート2、ピッコロ、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（大太鼓、シンバル、サスペンド・シンバル、タムタム、チューブラーベル、グロックンシュピール）、ハープ2、弦楽5部

【特別寄稿】

アンドレア・バッティストーニが語る「ダンテを読んで」

アンドレア・バッティストーニ／訳=井内美香

リストのピアノ音楽をよく知る者にとって、ハンガリー出身のこの作曲家が、珍しい響き、今までにない音色、オーケストラのプロットを鍵盤楽器で模倣する書法を追い求めたことは有名である。

「ダンテ・ソナタ」とも呼ばれるこの曲に魅せられた私は、それゆえに、管弦楽版を書くにあたって、これらの特徴を明確に示そうと決めた。この編曲は、1950年代ごろまで大いに流行していたオーケストラ編曲の例に連なるものとなる。すなわち目標とするところは、リストや彼の同時代人のスタイルによるオーケストレーションではなく、ラヴェル、レスピーギ、ストコフスキーなどの先例に多くを負っている、大オーケストラのための自由な編曲なのだ。

だがあらゆる編曲は、その性質上、敬意を示す行為であると同時に、裏切りでもある。

リストによる速度記号と表現記号は全てそのまま残したが、それは作曲者の意図に敬意を表するためであり、この翻案の出来得るかぎりの完全なヴィジョンを提供するためだ。一方、メトロノームの指示は筆者のものであり、この作品の管弦楽版の演奏に、より適していると判断した内容になっている。

リストのピアノリズムを交響楽の語彙に編曲するための音色の調合についても同様である。文献学、書かれた記号、そして原典への忠実さを非常に重視している今日の音楽界において、この作品が原曲主義者たちの気分

をあまり損なうことなく、過去の偉大なる作曲家への心からの捧げものとして居場所を見つけられるよう願っている。

リスト自身も、他の作曲家たちの音楽の編曲とパラフレーズを数多く手がけており、その中で、原作品への賛美と自身の解釈を組み合わせて、元の作品の魅力を再創造したという事実は、私を励ましてくれる。私を非常に惹きつけるのはやはり、このピアノの幻想曲の、神秘的で同時に苦しみをたたえた雰囲気であり、リストの天使的かつ悪魔的な音楽を見事に特徴づける、冥想とヴィルトゥオジティ(超絶技巧性)の二項式なのである。リストがこの作品を作曲するにあたり、ダンテ『神曲』の中のどの〈歌〉にインスピレーションを受けたのかは定かではないが、恐ろしい音の波間に地獄の炎を、もしくは、中間部のカンタービレに不幸な恋人たち、パオロとフランチェスカの物語を見出すことは難しくない。

冒頭の威嚇的なモットーは、こう歌っているかのようだ。「ここに入る者は、いかなる希望も捨てよ」、これは地獄の門の上に記された銘である。ここから、オーケストラの深淵へ、もしくは、ダンテが地獄篇で描写した〈環〉の深みへ、蛇のとぐろのように曲がりくねった半音階主義の螺旋を辿る、暗い下降が我々を待っている。

リストの特徴は、すでに言及したように、聖と俗の両方を備えていることだ。天使的なコラルに伴うトレモロから、天国の気配を感じるのはたやすいし、今述べた地獄への下降を対位法で彩るカンカンに似た舞曲からは、硫黄の悪臭が感じ取れる。だが私は、悪の深淵へのダンテの旅の終わりと、天の高みへ、そしてより良き世界の希望へと至る道行を、高らかな鐘の音と共にげるフィナーレがとても気に入っているのだ。

9/15

9/16

9/19

マーラー 交響曲第5番 嬰八短調

グスタフ・マーラー(1860-1911)が20世紀に作曲した、最初の交響曲。

この曲の作曲に着手した1901年は、40歳のマーラーにとって人生の転機だった。**彼の本職はウィーン宮廷歌劇場の総監督**。彼はウィーン・フィルの首席指揮者も兼務しており、**世界的な超一流指揮者**だった。その激務から健康を害するの無理はない。1901年3月には持病の痔から命に関わるほどの大出血を起こし、3回目の手術を受けた。もともと批判的だったウィーンの強い風当たりはさらに悪化し、彼は**ウィーン・フィルを辞任**した。



アルマ・シントラーの肖像写真

9/15

9/16

9/19

それでも彼は、宮廷歌劇場の総監督は辞めなかった。その仕事の合間を縫って交響曲第5番のスケッチをはじめたが、同年11月10日の日曜日、マーラーは運命の出会いを果たす。**アルマ・シントラー**(1879-1964)との出会いである。アルマは22歳、マーラーは41歳だった。お互い一目惚れし、そのわずか1ヶ月後の12月には婚約、翌年3月9日に電撃結婚した。世界的指揮者と美貌の才女との結婚は、まさにスキャンダルであった。

交響曲第2番から第4番までの3曲が、歌曲集『子供の不思議な角笛』に起源をもつ「声楽付き」交響曲であったのに対し、第5番から第7番の3曲は、「**純粋器楽**」の交響曲だ。第5番も、とくに文学的なプログラムはもっておらず、自作歌曲ともほとんど関係ない。彼の創作史にとっても、転換点となった交響曲といえる。

この曲で、既存の形式図式は換骨奪胎。**大きく見れば、「葬送」から「勝利」への流れが認められるが、ベートーヴェンの「苦悩から勝利へ」とはずいぶん面持ちが異なり、むしろパロディといってもよいだろう。**

第1部

第1楽章(葬送行進曲) 次の第2楽章への、長大な「序奏部」の機能を果たす楽章。荘重な葬送行進曲である。

第2楽章 ソナタ形式の楽章。アルマによれば「マーラーの自我と世界との激しい戦い」だという。

第II部

第3楽章〈スケルツォ〉 ホルン協奏曲と呼びたくなるほど、ホルンのソロが活躍する。

第III部

第4楽章〈アダージェット〉 マーラーと親交のあった指揮者メンゲルベルク(1871-1951)によれば、この切なく美しい〈アダージェット〉は、「マーラーの、アルマにあてた愛の証」だという。ヴィスコンティ監督が映画『ヴェニスに死す』(1971)のBGMとして用いて、世界的に大ブレイクした。

第5楽章〈ロンド・フィナーレ〉 ロンドと題されているがフーガが6回も挿入されていて、マーラーのバッハ体験が如実に感じ取れる。

[作曲年代] 1901~1902年 [初演] 1904年10月18日、ケルン、ギュルツェニヒ管弦楽団の演奏、作曲者自身の指揮による

[楽器編成] フルート4(ピッコロ2持ち替え)、オーボエ3(イングリッシュ・ホルン持ち替え)、クラリネット3(変ホ管クラリネット、バスクラリネット持ち替え)、ファゴット3(コントラファゴット持ち替え)、ホルン6、トランペット4、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(小太鼓、大太鼓、シンバルを固定した大太鼓、トライアングル、シンバル、グロッケンシュピール、タムタム、ホルツクラッパー)、ハーブ、弦楽5部

のもと・ゆきお(指揮・音楽学) / 桐朋学園大学助教授を経て、玉川大学芸術学部教授。毎年1000人の『第九』を指揮。NHK「ららら♪クラシック」、Eテレ学校番組「おんがくブラボー」番組委員をはじめ、「又吉直樹のヘウレーカ!」や「世界で一番受けたい授業」ほかに出演。現在、NHK-FMラジオ「オペラ・ファンタスティカ」レギュラー解説員。全音楽譜出版社より詳細な解説・分析付きの「リスト原典版楽譜」を7冊刊行。